

釧路市の冒険教育プログラムの取り組みと参加者の自己概念の変容

諫山 邦子¹・奥山 洌²・加藤 敏之²・森 敏隆³

¹北海道教育大学釧路校学校教育講座幼児教育 ²教育北海道教育大学釧路校学校教育講座教育心理学 ³釧路市教育委員会

Adventure education programs of Kushiro and a study on the change of the self-concept of the program participants

Kuniko ISAYAMA¹, Kiyoshi OKUYAMA², Toshiyuki KATO² and Toshitaka MORI³

¹Department of Preschool, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

²Department of Educational Psychology, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

³Board of Education, City of Kushiro, Kushiro 085-8505, Japan

はじめに

1996年7月に文部省から出された「青少年の野外教育の充実について」の報告によると、野外教育プログラムの課題の中に、プログラムの開発の不足や効果分析・評価研究の不足が挙げられている¹⁾。

プログラムの開発の不足として、例えば野外教育プログラムという夏季、テント泊、飯盒炊さん、キャンプファイヤーという認識の固定化が多様なプログラムを阻害していると指摘している。また、効果分析・評価研究の不足については、主観的な満足感や経験論的な評価は、野外教育の成果を裏付ける重要な要素の一つであるが、標準化された効果分析・評価研究の手法が確立されておらず、一般的には客観的な成果の分析がなされていないことが課題であるとしている。

本研究では、上記2点(プログラム開発と効果分析・評価研究)に関わって、まず、夏季以外のプログラム開発として、釧路市が新しい取り組みとして行った冬季冒険教育プログラムの開発の試みをとりあげる。次に効果分析として冬季冒険教育プログラムが参加者の自己概念の変容に及ぼす影響について先行研究に引き続いて別の分析法から考察していくこととする。釧路市が行った2年分の冒険教育プログラムをまとめて一つの教育プログラムとして扱った、参加者の自己概念の変容についてはすでに報告してある²⁾。ここでは事後調査と事前調査の得点差を自己概念の変化としてとらえ、参加した青少年に及ぼすプログラムの影響を時期および学年のそれぞれについて比較考察することとした。

1. 冬季冒険教育プログラムの開発の試み

釧路市教育委員会では、わが国の一般的状況と同様に、釧路の青少年をとりまく社会環境が都市化、核家族化、少子化、情報化、高学歴化などで激しく変化し、また、地域社会の「地域性」が拡散して、「共同性」が弱体化し家庭・地域社会の教育力が衰退しているとしている。そして、それらの状況が背景としてあるため、青少年の登校拒否、いじめ、非行などの問題行動が繰り返し発生してきたとらえている。

同教育委員会では、このような状況の中、学社融合の試みや家庭、地域の教育力の活性化を最重点課題として位置づけ、各種施策の展開にあたっている。特に青少年の育成には「自然や人との関わり」が重要な要素であると押さえ、自然の中で組織的、計画的に一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称としての野外教育の理念を基にして、青少年の知的、身体的、社会的、情緒的、すなわち全人的成長を支援するために青少年事業を実施し、その充実と普及をめざしている。

野外教育の先進国のアメリカ合衆国の宿泊型キャンプは、しばしば冒険的活動が含まれており、そこでは技能だけでなく参加者間の人間関係や個人の成長に主眼がおかれて³⁾ 野外の環境を活用した効果的なプログラムが展開されている。そして多くの冒険的活動が自己や人間関係に及ぼす効果が明らかになっている^{4)~7)} このことから釧路市での事業の中で、1997年1月と1998年1月に行われた冬季宿泊研修を冒険教育プログラムとして位置づけ、冒険的活動を取り入れた野外教育プログラムを企画し、立案

し、展開をしていく試みを行った。

事業の目的は、「雄大な自然や異年齢の人達との関わりを中心とした、日常では味わえない体験を通して、自然に関心を持ち、友達と協調して行動しようとする」とした。以下に各年度ごとの冒険教育プログラムの概略と展開について紹介していく。

1. 1997年ジュニアリーダー養成・冬季宿泊研修

- (1) 活動期間：1997年1月16日～18日 2泊3日
- (2) 活動場所：道立厚岸少年自然の家とその周辺
- (3) 参加者：小学校5年生～高校2年生
- (4) メインプログラム：アドベンチャートレッキング
(氷雪上16km)、野外炊さん
- (5) 組織とプログラムの特徴

1996年までの冬季宿泊研修は教育委員会職員9名がスタッフとして参加し、各グループを1名ずつの職員が受け持つ形式をとっていた。しかし、1997年からは、指導体制を整備し、職員を5名程度に削減し、職員はグループを受け持たず、全体的な支援者の立場を担うこととした。つまり、これまでは、一つのグループに受け持ち職員1名、高校生・中学生は全員シニアリーダー、ジュニアリーダーとし、さらに小学生の中から班長を1名配置してグループ編成を行ってきたが、実際には参加者が受け持ち職員の指示待ちでグループ内のリーダーが育たない状況であった。そこで1997年からは、中学2年生以上のシニアリーダー1名にグループ(1グループ7～8名で構成されている)を実質的に任せて運営させる試みを取り入れた。具体的には、引率職員の行う内容、グループのリーダーが行う内容について明記した活動案を作成し、これを基に参加者とスタッフ全員が共通理解を持った上で、研修に取り組むことをめざした。

プログラムについては、これまでは、いろいろな体験の羅列であり、プログラム内容の一つ一つにどのような効果があるのか、何をめざしているのかが明確にされずに行わ

れていた。そこで冒険活動を中心に据えた内容で、自己概念の成長に効果の重点化を図ることとして立案をおこなった。内容は、氷雪上の16kmトレッキングと氷点下の環境の中での野外炊さんであった。

(6) プログラムの展開

図1、図2のとおり日程を追ってプログラムが展開されていった。

2. 1998年ジュニアリーダー養成・冬季宿泊研修

- (1) 活動期間：1998年1月16日～18日 2泊3日
- (2) 活動場所：道立足寄少年自然の家とその周辺
- (3) 参加者：小学校5年生～高校2年生
- (4) メインプログラム：耐寒トレッキング・歩くスキー
(氷雪上17km)、耐寒テント泊(中学2年生以上)
- (5) メインプログラムの活動内容

前年度の氷雪上アドベンチャートレッキングと同様な冒険活動として、耐寒トレッキング12km・歩くスキー5km、計17kmのプログラムを配し、さらに中学2年生以上の参加者を対象に最低気温マイナス22度、テント内最低気温マイナス8度の環境下での耐寒テント泊を加えた。

耐寒テント泊ではスリーシーズン用のテントとシュラフを使用し、5人用のテント5張にそれぞれ3～4名ずつ宿泊した。防寒の工夫を各自で考えられるように意図し、防寒用のシート、段ボール、毛布を準備した。参加者は午後7時にテントへ移動し、テント内の温度を上昇させ、午後9時に消灯、11時過ぎには全員就寝した。翌朝6時過ぎには施設内へ移動し、朝食まで布団の中で休養した。

(6) プログラムの展開

図3、図4のとおり日程を追ってプログラムが展開されていった。

II. 冒険教育プログラムの効果分析

1. 方法

調査対象 釧路市主催の1997年1月、1998年1月にお

表1 1997年冬季宿泊研修参加者内訳

	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	計
男	11	6	1	-	1	5	-	24
女	6	21	11	3	1	2	-	44
計	17	27	12	3	2	7	-	68

表2 1998年冬季宿泊研修参加者内訳

	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	計
男	4	12	3	3	2	1	3	28
女	6	9	12	7	2	-	1	37
計	10	21	15	10	4	1	4	65

＜第3日目＞

時刻	内容	活動	留意点	場所
6:30	起床 洗面 持ち物準備	参照	○前述 参照	
7:30	朝食	参照	○前述 参照	体育館 食堂
9:00	A 歩くスキー B 七宝焼	参照	○前述 参照	工作室
12:00	昼食 持ち物準備	参照	○前述 参照 ○前述 ティーアは、部屋を分担当してグループにこだわらず点検を行う。 ○ポラン ティーアが、よいと判断したら、指導者に連絡、指導者の合図がでるまで全員の部屋に待機 ○この前掲がうまくいくかどうかは、第1日目の生活の心組でのポラン ティーアの振り返りから	食堂 客席
14:00	体操発表 別れのつどい	参照	○(同会) 指導者 体操発表 (総括) 石井課長	体育館
14:30	バス乗車	参照	○前述 参照	
15:30	到着	参照	○前述はもたず、ポランティアを中心にグループごとに握手をしてここに全日荷が終了する。	市役所北側

＜第2日目＞

時刻	内容	活動	留意点	場所
6:30	起床 洗面 持ち物準備	参照	○前掲が終了した時点でポランティアに点検をしてもらう。ポランティアはきちんとできない子にやり直さすよう指示する。 ○アドベンチャートレッキングに必要な持ち物の確認	各部屋
7:30	朝食	参照	○前述 出発のつどい参照 (発表はポランティアから) ○前述 夕食の準備 ○ポランティアは集合時間場所の確認をする。(玄関前9:00) ○指導者は、一人一人を確認し、体調のチェックをする。	体育館 食堂
9:00	アドベンチャー ・トレッキング			
15:00	休憩	参照	○ポランティアは十分体を休めるよう指示する。 ○前述 参照	
16:30	体操発表	参照	○アドベンチャー・トレッキングでの様子、気持ちを中心に作文を書く。したことこの場ではなく気持ちを移り変りを中心に書くことを伝える。 ○書いた作文を夜の話し合いで発表することを伝える。	おおくま
17:00	A 炊飯活動 B 夕食 持ち物準備 球技大会	参照	○前述 参照 ○前述 参照	
19:00	自炊	参照	○前述 参照	
20:30	話し合い	参照	○話し合いの場点 ・体操発表の発表 ・ミーティングのテーマ⑥ ・明日の日程について	各部屋
21:00	指導者・ポラン ティア打ち合わせ	参照	○前述 参照 ○体操発表者の決定	指導者の部屋
22:00	就寝確認	参照	○前述 参照 ○1日目より指導を確認	

図2 1997年冒険教育プログラム(冬季宿泊研修)の日程-II

<<第1日目>>

時刻	内容	活動・留意点	場所
8:30	集合・受付	◆シニアは8:20まで集まり、集合場所まで全員そろった後、班ごとにまとまり、班長に報告	市役所裏
8:45	出発式	◆シニアは班長とともに班員を整理させる ◆石井課長より出発のあいさつ ◆班ごとにバスに乗る。座席はシニアの指示に従う(仲良しの中学生、高校生同士が隣ることがないようにし、自分の班の近くに座ること) ◆指図書から注意事項の連絡 ◆シニアは班の役割を伝える ◆シニアはバス中ゲーム ◆本別町教育委員会から歩くスキー(12本)借用(シニア教員手伝い)	市役所裏 バス中
9:00	バス出発	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
11:30	ネイバル あしよろ到着 出合いの集い 生活の心構	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
12:10	昼食	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
13:00	野外活動準備	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
時刻	シニア活動 (石井・紺谷)	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
13:05	◆指図書は早めにスキー靴をプレイルールに非おおく ◆プレイルールについて説明 ◆歩くスキーのことについて説明 ◆スキー靴の履き方(野山) ◆練習開始(サツカ一駅) ◆翌日、急な下り坂があることを伝えさせる ◆スキー片付け ◆雪遊び開始(時刻はカルタ大会・そりレースなど) ※スキーの練習時間によって、ここを時間調整	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
13:30	◆スキー・ストックの履き方(野山) ◆練習開始(サツカ一駅) ◆翌日、急な下り坂があることを伝えさせる ◆スキー片付け ◆雪遊び開始(時刻はカルタ大会・そりレースなど) ※スキーの練習時間によって、ここを時間調整	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
14:00	◆翌日、急な下り坂があることを伝えさせる ◆スキー片付け ◆雪遊び開始(時刻はカルタ大会・そりレースなど) ※スキーの練習時間によって、ここを時間調整	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
15:00	◆スキー片付け ◆雪遊び開始(時刻はカルタ大会・そりレースなど) ※スキーの練習時間によって、ここを時間調整	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
時刻	シニア活動 (森・轟・牧野)	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
13:05	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
14:00	◆翌日、急な下り坂があることを伝えさせる ◆スキー片付け ◆雪遊び開始(時刻はカルタ大会・そりレースなど) ※スキーの練習時間によって、ここを時間調整	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中
15:00	◆スキー片付け ◆雪遊び開始(時刻はカルタ大会・そりレースなど) ※スキーの練習時間によって、ここを時間調整	◆荷物と班員を整理させる(司会 指導者) ◆男子・女子いずれかの部屋に班全員が集まり、生活の心構えについて話し合う(具体的なシニアから①本日の日程について(具体的に)②遺品・道具の整理について③ヘアトリートメントについて④ヘルメットについて⑤その後一人一人がやってみる⑥引き続き班ごとに昼食をとる(シニアは班員とともに昼食をとり、歯が打ちとけられるようにする)	バス中

時刻	シニア活動 (石井・紺谷)	シニア活動 (森・轟・牧野)	時刻
16:00	◆スキー靴は各自、自分の部屋へ持っていき、並べて干しておく ◆自分の靴は乾燥室へ ◆休憩 ◆夕飯のついで (班長が責任を持ってグループを整理させる)	◆スキー靴合わせ (時間がある場合は練習) ◆スキー靴は各自、自分の部屋へ持っていき、並べて干しておく	16:00
17:00	◆夕飯	◆夕飯	17:30
18:00	◆生活係はシューズを取りに行く	◆宿舎準備	18:00
18:30	◆自由・入浴	◆テント内へ	18:30
21:00	◆就寝準備 *班長は正しくシューズを引くように指導 *寝ている子は厳重注意 *2度目は許されないことを伝える	◆野外消開始 (21:00までにトイレを済ませ21:00以降はテント外禁止) ◆就寝確認 (指導者見回り)	19:00 21:00
22:00	◆就寝確認 (指導者見回り)		21:00

<<第2日目>>

時刻	シニア活動 (石井・紺谷)	シニア活動 (森・轟・牧野)	時刻
6:30	◆起床・洗面・清拭 (上級生全員の責任とする)	◆起床・洗面・清拭 (上級生全員の責任とする) *指図書が呼びびにいく *施設内の各部屋に戻り寝る (体を暖める)	6:00
7:30	◆朝食(班ごと)	◆朝食(班ごと)	7:30
8:50	◆スキー・水筒・弁当・タオル・ゴミ袋・ティッシュ・手袋・帽子	◆テント撤去 ◆寝マット→物置 (電池は) ◆ランタン→物置 (電池は) ◆毛布→研修室に干す ◆寝袋→研修室に干す ◆テント→丸洗い(体に広げる (テント袋も近くに置く))	7:30 8:20
9:20	◆玄園前集合 (石井・牧野・紺谷) ◆コスプレ (地図を班長に渡す)	◆スキー・水筒・弁当・タオル・ゴミ袋・ティッシュ・手袋・帽子 ◆玄園前集合 (石井・牧野・紺谷) ◆コスプレ (地図を班長に渡す)	9:40 9:50

図3 1998年冒険教育プログラム(冬季宿泊研修)の日程-I

<第3日目>

時刻	内容	活動・留意点	場所
6:30	起床・洗面 着崩 持ち物整理	◆全員で清掃を行い、終了した時点でシニアが点検に回る(布団のたたみ方・ごみ箱の中のごみなど全部チェックする)	各部屋
7:30	朝のつどい	◆班長の指示がなくても個々が整列できること	プレイホール
7:40	朝食	◆班ごとにたなべべる ◆朝食後、荷物を研修室へ移動する	食事館
8:45	部屋の点検	◆ゲーム担当以外のシニアはネイパルの指導員とともに、点検をする。指導を受けた所は責任を持ってやり直す。	
9:00	ゲーム大会	◆シニアにまかせ(指導者は楽しく参加する) ソフトバレー・ドッジボール	プレイホール
10:30	まとめ	◆自己診断書の記入 ◆石井理恵よりまとめのお話 ◆シニア代表より一言 ◆次回終了式(3月頃)などの連絡(紺谷)	研修室
11:30	昼食		食事館
12:10	出発 1~4班は 1号車(31A) 5~8班は 2号車(34A)	◆班ごとにバスに乗る。座席はシニアの指示に従う。(仲良しの中学生、高校生同士が隣ることがないようにし、自分の車の近くに座ること) ◆本別町教育委員会に歩くスキー(12本)を返却(シニア数人手伝い)	バス中
14:30	腳踏車 解散	◆解散式はしない シニアは班員全員と握手をして声をかける ここに全日程が終了する	市役所裏

時刻	シニア活動	時刻
9:45 ~ 10:00	◆2班ずつまとめて5分置き に出発 1・2班(9:45) 紺谷 3・4班(9:50) 牧野 5・6班(9:55) 石井 7・8班(10:00) 藤 ◇ネイパル出発(最後尾 森)	10:10
11:30	◆スキーを受け取る ◆昼食・休憩(ごみは自分で持ち帰る)	トラック 入口
12:15	◆スキーの準備	"
12:30	◆スキーを開始 ◆スキーのレベルによりすべれる子は先に行かせ る(スキーに自信のない子は無理をせず下り終 了地点までトレッキング) 10人~20人位にまとめて	くんだり開始 地点
14:30	◆スキーを終了 ◆休憩(班員がそろうまで待っている)	青少年会館
14:45	◆必ず班ごとでトレッキング *例外は許さずまとめていくことを指示する *一般の歩道なので、他の人の迷惑や車に十分 注意するよう指導する。	"
15:45	◆スキー・スキー靴を片付ける ◆シニアはテントや寝袋など最終片付け ◆休憩・入浴可能	
17:00	(歩くスキー・トレッキングの終了時間によって は省略の可能性あり)	プレイホー ル
17:30	◆班ごとでまとまる	食事館
18:30	◆反省・感想文(指定の用紙に書いて、班長がま とめて持ってくる)	
21:30	◆シニアは各部屋にもどり、早く寝るよう指示す る。	各部屋
22:00	◆指導者が視察確認(最終確認23:00) *シニアも含め、就寝しようとしなない子は、不正 行為とみなし保護者へ連絡、早朝引き取りさせる *例年、眠不足により体調をくずし、3日前早々 学校を欠席する例があるので指導を徹底する	

図4 1998年冒険教育プログラム(冬季宿泊研修)の日程-II

こなわれた冒険教育プログラム(ジュニアリーダー養成事業・冬季宿泊研修)の参加者67名(1997年)と65名(1998年)を調査対象とした。学年、性別は表1、表2のとおりであった。

検査および手続き 梶田の研究⁸⁾と調査⁹⁾を参考に、釧路市の冒険教育プログラムに参加する青少年に期待する自己概念の成長性についての自己概念調査票を作成し、冒険教育プログラム参加前(8~10日前)のオリエンテーショ

ン時、直後および1ヶ月後の3回にわたって回答をもとめた。検査に使用された自己概念調査票は29項目から構成され、「非常にあてはまる」を5点とし、「全くあてはまらない」を1点とする5段階評価とした。本研究では、表3のアンダーラインが付してある7つの項目については逆転項目として扱い計算を行っている。因子得点についても同様に計算を行った。結果の考察は事前と直後の調査のみを扱った。

表3 尺度値の変化量(事後調査と事前調査の差)の比較 平均(標準偏差)

項目	時期		学年		検定結果		
	1997年 (N=64)	1998年 (N=51)	小学生 (N=64)	中学生以上 (N=51)	時期	学年	交互作用
1 自分に自信を持っています。	.328(.82)	.235(.97)	.359(.86)	.196(.92)			
2 人よりおとっていると感ずることがある。	.297(.94)	.137(.83)	.172(.97)	.294(.78)			
3 自分を頼りないと思うことがある。	-.000(1.02)	.177(1.20)	-.016(1.15)	.196(1.04)			**
4 失敗するのは自分のせいだと思っている。	-.078(.82)	-.118(.91)	-.156(.91)	-.020(.79)			
5 自分の考えを通すほうである。	.094(.92)	-.137(.98)	.000(.91)	-.020(1.01)			
6 人よりすぐれていると思う。	.234(.97)	.137(.66)	.313(.91)	.039(.75)			
7 自分でできること、できないことをよく知っている。	.234(.97)	.235(1.09)	.250(1.14)	.216(.86)			
8 がんばれば、できないこともできるようになると思う。	.125(.68)	.216(.88)	.156(.60)	.177(.95)			
9 今のままの自分ではいけないと思うことがある。	.031(.98)	.196(1.23)	.109(1.14)	.098(1.04)			
10 今の自分には、やりたいことがある。	.219(.81)	.020(.91)	.188(.89)	.059(.81)			
11 何にでも興味を示すことが多い。	.188(.92)	.137(.87)	.250(.91)	.059(.88)			
12 大人になったらやりたいことがある。	.016(.70)	.078(.63)	.063(.69)	.020(.65)			
13 自分には生きがいある未来が待っていると思う。	.234(.75)	-.157(.78)	.156(.88)	-.059(.65)	*		
14 楽しいこと、やりたいことをいつも探している。	-.078(1.04)	-.020(1.21)	-.063(1.26)	-.039(.92)			
15 考えるより、まず行動するほうである。	-.109(1.07)	-.098(.94)	-.125(1.09)	-.078(.91)			*
16 手がけたことは全力をつくしたい。	.125(.77)	.255(.82)	.156(.80)	.216(.78)			
17 自分はいろいろな人達に支えられて生きていていると思う。	.125(.70)	.098(.58)	.203(.65)	.000(.63)			†
18 友達の考えもよく聞くほうである。	-.031(.64)	.255(.82)	.172(.70)	.000(.78)	*		†
19 自然の大切さについてよく考えている。	.281(.83)	.275(.80)	.359(.74)	.177(.89)			
20 自分は自然と一緒に生きていていると思う。	.313(.80)	.294(.92)	.328(.87)	.275(.83)			
21 自分自身のことばかり考えているほうである。	.172(.83)	-.353(.93)	-.063(.91)	-.059(.93)	**		
22 友達もまた友達自身のことだけを考えていると思う。	.094(.90)	-.431(1.06)	-.250(1.02)	.000(.98)	**		*
23 一人でも生きていていると思う。	-.172(.88)	-.020(1.19)	-.094(1.05)	-.118(1.01)			
24 今、やらなければならないことがわかっている。	.047(.86)	.078(1.15)	.000(.96)	.137(1.04)			
25 今いる学校又は地域を変えたいと思っている。	-.031(.99)	.235(1.38)	.172(1.22)	-.020(1.14)			
26 自分は、世の中ののために生まれたと思っている。	.281(1.09)	.235(1.01)	.250(1.11)	.275(1.06)			
27 人の役にたつことをしたいと思っている。	.141(.66)	.196(.92)	.281(.90)	.020(.58)			†
28 困っている友達を助けるほうである。	.047(.81)	.078(.69)	.047(.77)	.078(.74)			
29 自分は世の中に必要な人間だと思う。	.281(.86)	.275(.78)	.391(.90)	.137(.69)			

備考 ** : p<.01, * : p<.05, - : .05<p<.10

表4 総得点および因子得点の変化量(事後調査と事前調査の差)の比較 平均(標準偏差)

項目	時期		学年		検定結果	
	1997年 (N=64)	1998年 (N=51)	小学生 (N=64)	中学生以上 (N=51)	時期	学年 交互作用
自己概念総得点の変化量	1.906(5.22)	3.373(6.71)	3.484(6.08)	1.392(5.60)	+	*
I 自己信頼得点の変化量	.828(2.95)	.275(2.86)	1.000(3.01)	.059(2.72)		*
II 環境教育得点の変化量	.703(1.58)	.843(2.02)	.969(1.86)	.510(1.67)		
III 対人関係得点の変化量	-.063(1.99)	1.529(2.52)	.891(2.17)	.333(2.58)	**	*
IV 自己認識得点の変化量	.516(1.77)	.412(2.31)	.500(2.09)	.431(1.94)		
V 自己責任得点の変化量	-.078(1.65)	.314(2.31)	.125(2.11)	.059(1.79)		

備考 **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $.05 < p < .10$

2. 結果

項目ごとの変化 本研究では、冒険教育プログラムに参加したことによる自己概念の変化を、事後調査と事前調査の得点の差としてとらえ、これらを分析の対象とした。分析は時期(1997年、1998年の2水準)、および学年(小学生、中学生以上の2水準)を要因とする2要因分散分析により行った。表3は各尺度値の変化量(事後調査結果-事前調査結果)の平均ならびに標準偏差、および分析の結果を示す。

項目3「自分を頼りないと思うことがある」で交互作用が有意であった($F(1,111) = 9.67, p < .01$)。それぞれの水準毎の平均(標準偏差、人数)は、1997年の小学生-0.256(0.99, 43)、同じく中学生以上で0.524(0.85, 21)、1998年の小学生で0.476(1.26, 21)同じく中学生以上で-0.033(1.08, 30)であった。そこで各水準毎に単純主効果を分析した結果、学年の要因が1997年において有意($F(1,111) = 7.07, p < .05$)、1998年において有意傾向($F(1,111) = 3.02, .5 < p < .10$)であった。すなわち1997年では冒険教育プログラムを体験した小学生が自信を低め、中学生が自信を高めるのに対して、1998年では逆の傾向にある。

項目15「考えるよりもまず行動する」も交互作用が有意であった($F(1,111) = 4.32, p < .05$)。それぞれの水準毎の平均(標準偏差、人数)は、1997年の小学生で0.000(1.12, 43)同じく中学生以上で-0.333(0.89, 21)、1998年の小学生で-0.381(0.95, 21)、同じく中学生以上で0.100(0.87, 30)であった。そこで各水準毎に単純主効果を分析した結果、学年の要因が1997年において有意ではなかったが、1998年において有意傾向($F(1,111) = 3.05,$

$05 < p < .10$)であった。すなわち、1998年の冒険教育プログラムの体験により、行動的であるという自己評価が小学生では低まるのに対し、中学生以上では高まる傾向にある。

これら以外の項目では、いずれも交互作用は有意ではなかった。項目13「自分には生きがいある未来が待っていると思う」では、時期について有意差があり、($F(1,111) = 5.71, p < .05$)、1997年では正の変化をしたのに対して、1998年では負の変化を示した。項目17「自分は色々な人に支えられて生きていると思う」では、学年に差の傾向があり、($F(1,111) = 2.99, .05 < p < .10$)、小学生の変化は中学生以上よりも傾向として大であった。項目18「友達の考えもよく聞くほうである」では、時期で有意差($F(1,111) = 6.16, p < .05$)、学年で差の傾向($F(1,111) = 3.74, .05 < p < .10$)があり、1997年では負の変化を示したのに対して、1998年では正の変化を示し、また、小学生の変化は中学生以上の変化に比べて大であった。項目21「自分自身のことばかり考えているほうである」では時期について有意差があり、($F(1,111) = 11.34, p < .01$)、1997年が正の変化を示したのに対し、1998年では負の変化を示した。項目22「友達もまた友達だけのことを考えていると思う」では、時期($F(1,111) = 11.06, p < .01$)、および学年($F(1,111) = 5.11, p < .05$)のいずれも有意差があり、1997年が正の変化を示したのに対して、1998年では負の変化を示し、また、小学生が負の変化を示したのに対して中学生以上は変化を示さなかった。項目27「人の役にたつことをしたいと思っている」では、学年で差の傾向があり($F(1,111) = 3.83, .05 < p < .10$)、小学生の変化が中学生以上の変化に比べて傾向として大であった。

総得点および因子得点の変化

両年の冒険教育プログラムの実施直後の調査結果を合わせて因子分析を行った。主成分分析法により得られた結果にもとづき、共通性の低い6項目(項目番号6、8、11、14、15、23)を除く23の項目について再度の分析を行った。その際、因子数は5個を指定しバリマックス回転を施した。共通性は.41から.65の範囲であったが、.71というKMOの値が得られたので標本妥当性が保証されたものと判断し、解釈を進めた。それぞれの因子の名称(寄与率)、項目番号ならびに因子負荷量は以下の通りである。

- I. 自己信頼(18.9%) 26(.771), 29(.703), 13(.639), 3(-.613), 1(-.598), 2(-.535)
- II. 環境教育(11.8%) 27(.739), 16(.633), 20(.632), 17(.628)
- III. 対人関係(9.4%) 21(.698), 5(.610), 22(.579), 18(-.566), 28(-.498), 19(-.463)
- IV. 自己認識(6.5%) 24(.737), 10(.691), 7(.539), 12(.460)
- V. 自己責任(5.9%) 25(.679), 9(.673), 4(.612)

項目2、3、21、5、22を逆転項目として処理し、因子得点を計算した。また因子得点の合計を自己概念総得点とした。表4は自己概念総得点および因子得点の変化量(事後調査結果-事前調査結果)の平均ならびに標準偏差とこれらについての2要因分散分析の結果を示す。自己概念総得点の変化量は1998年が1997年よりも傾向として大であり、 $(F(1, 111) = 3.72, .05 < p < .10)$ 、また小学生が中学生以上よりも有意に大であった $(F(1, 111) = 5.32, p < .01)$ 。自己信頼得点の変化量については交互作用が有意であった $(F(1, 111) = 5.67, p < .05)$ 。単純効果を分析したところ、1997年で小学生の変化量が中学生以上よりも有意に大であった $(F(1, 111) = 7.11, p < .01)$ 。また小学生の変化量は1998年が1997年よりも傾向として大であった $(F(1, 111) = 3.98, .05 < p < .10)$ 。対人関係得点の変化量は1998年が1997年よりも有意に大であり $(F(1, 111) = 18.98, p < .01)$ 、また小学生が中学生以上よりも有意に大であった $(F(1, 111) = 5.85, p < .05)$ 。

3. 要約

1997年と1998年に行われた釧路市の冒険プログラムに参加した青少年の自己概念の変化を、事前と事後調査の得点の差を変数にしてとらえると、時期と学年によりいくつかの違いが認められた。

項目3と項目15に上記2要因の交互作用がみとめられ、項目3は1997年に小学生で負の変化、中学生以上で正の変化を示したが、1998年にはこの関係が逆転した。また項目15は1998年に小学生で負の変化、中学生以上で正の変化を傾向として示した。

項目17、項目18、項目27については、小学生の変化が中学生以上の変化に比べて大であり、項目13と項目22では1997年が正の変化、1998年が負の変化、項目18と項目21は1997年では負の変化、1998年では正の変化を示した。

自己概念総得点は中学生以上に比べ、小学生が高く、また対人関係得点は1997年に比べ1998年が、中学生以上に比べ小学生がそれぞれ高かった。

おわりに

釧路市の新しい試みとしての青少年対象の冒険教育プログラムは、参加者がグループ運営をより自主的に行えるように配慮した体制を整え、自己概念の成長に効果があるようにとの意図で、特に冬季の寒冷条件に対する冒険的活動をとり入れた冒険教育プログラムとして企画、立案、展開がなされた。

これらのプログラムの効果について、参加者の自己概念の変化量の差について検討したところ、29項目中明確な差が認められたのは、時期について4項目、学年について1項目であった。また、5因子中1因子について時期の差が認められた。総体としては、尺度あるいは因子のいずれについても時期、学年の差は優勢ではない。このことから両年度のいずれのプログラムも参加した青少年に対して、同じような効果をもたらしたのではないかと推察される。

顕著な差は対人関係に関わる第3因子およびそれに含まれる尺度「18. 友達の考えもよく聞くほうである」「21. 自分自身のことばかり考えているほうである(逆転項目)」において認められ、1997年に比べ、1998年のプログラムが対人関係に関する自己概念の積極的な変化をもたらしたことが示唆される。プログラム内容に則して見たとき、内容上の主な違いは、1998年にトレッキングに加えて歩くスキーが導入されていることと、シニアの参加者に対して耐寒テント泊を課したことである。これらの要素が、参加者に対して1997年にはなかった新たなストレスを与え、その結果として必然的な相互交流が生まれ、自己概念の変化に結びついたのかもしれない。

今後はクラスター分析等の手法を用いて個人に視点を

当て、参加者の分類をし、プログラムの効果を見ていき、それぞれの参加者に適合したプログラムのメニューづくりの基礎データを得たいと考える。

引用文献

- 1) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議. (1996) 青少年の野外教育の充実について. 文部省, 9-10.
- 2) 諫山邦子・奥山洸・加藤敏之・森敏隆. (1998) 釧路市の野外教育プログラムの参加者の自己概念の変容の変容. 野外教育研究, 2(1).
- 3) Van der Smissen, B. (1997) Directions in Outdoor Education. 野外教育研究, 1(1): 6.
- 4) Evert, A. (1988) Decision Making in the Outdoor Pursuits Setting. *The Journal of Environmental Education*, 20(1): 3-7.
- 5) Crompton, J.L. and Seller, C. (1981) Do Outdoor Education Experience Contribute to Positive Development in the Affective Effectation? *JEE*, 12(4): 21-29.
- 6) 井村仁. (1982) アドベンチャープログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系紀要, 5: 59-70.
- 7) 関根章文・飯田稔. (1996) キャンプ経験が児童の自己概念と一般性自己効力に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系紀要, 19: 85-89.
- 8) 梶田毅一. (1985) 子どもの自己概念と教育. 東京大学出版会, 50.
- 9) Kajita, E. (1976) Development of self-growth attitudes and habits in school children. *Research Bulletin of the National Institute for Educational Research*, 14: 27-43.